

先史時代の立川

立川市が位置するのは東京都のほぼ中央部で、都心からは約30km 西方にあります。地形的には多摩川に沿った低地と一段高い武蔵野台地からなっています。市内では北西部にあたる西砂町が125mでもっとも標高が高く、南東に向かってだんだんと低くなっています。

今回は地形図と照らし合わせながら、立川の遺跡について見てみましょう。

立川の遺跡一覧

- | | | |
|------------|---------|---------|
| ① 西砂川 | ② 殿ヶ谷新田 | ③ 松中ツ原 |
| ④ 天王橋B地点 | ⑤ 上水向 | ⑥ 宮ノ橋 |
| ⑦ 大山道東 | ⑧ 川越道西 | ⑨ 観音寺原 |
| ⑪ 台 | ⑫ No.12 | ⑬ No.13 |
| ⑭ 大和田 | ⑮ 普済寺 | ⑯ No.16 |
| ⑰ 都史跡立川氏館跡 | ⑯ 向郷 | ⑯ 台の下 |
| ⑯ 下大和田 | ⑯ No.21 | ※10番欠番 |

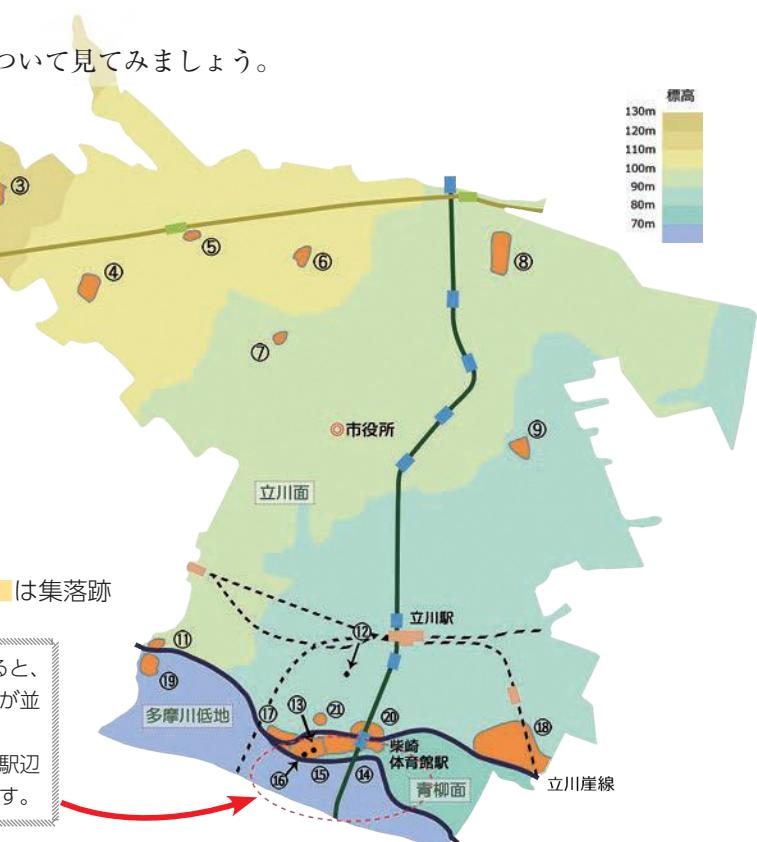
■は集落跡

赤い線で囲まれた地域の昭和15(1940)年頃の写真(下図)を見ると、台地、崖線、多摩川低地の様子がよく分ります。崖線沿いには木々が並び、台地上には住宅地が、低地には田んぼが広がっています。

現在は市街化が進み、風景は様変わりしていますが、柴崎体育館駅辺りから続く急な崖は、多摩川が台地を削った長い歴史を今に伝えます。

人が生きていく上で最も重要なのは水を確保することです。立川の遺跡の分布から、水と人との関わりを見ることができます。

立川市では、多摩川に近い南部地域で多くの遺跡や遺物が発見されています。多摩川の流れが長い年月を経て武蔵野台地を削り、階段状に段丘を形成しました。この段丘末端の斜面を崖線と呼びます。崖線は歩いて上り下りできるなだらかな場所もあれば、急な崖になっている場所もあります。台地上に降って浸みこんだ雨水が崖線下で湧き水となって、やがて小川となります。



市内で規模の大きい縄文時代中期(約5,000年前)の大和田遺跡(柴崎体育館駅周辺)と向郷遺跡(羽衣町三丁目付近)は市南部の立川崖線沿いに形成されています。この周辺はやや急な坂になっていて、大和田遺跡の近くには根川が、向郷遺跡の近くには矢川が流れています。縄文時代当時は、護岸工事や水量を制御する技術がなかったので、たびたび起こる水害にも備えなければなりませんでした。台地上に生活の拠点を置き、緑と水の豊かな周辺地域で狩猟・採集を中心の食糧調達をするのが、当時の生活スタイルだったようです。

一方、市北部の砂川地域からも、わずかですが旧石器時代から縄文時代前期の石器などが採取されています。この地域はまだ本格的な発掘作業が行われておらず、かつての残堀川の流路やその他の水場についても不明な点が多いため、当時の人びとがこの地でどんな活動をしていたかはつきりとは分かっていません。調査が進めば、立川市域全体から見た人びとの居住地の移り変わりや、周辺地域との交流の様子も明らかになっていくでしょう。

◆左図の色が塗られている部分が多摩川低地
柴崎町周辺／南側、多摩川上空から (昭和15(1940)年)
歴史民俗資料館所蔵

先史部会では、旧石器時代から古墳時代の立川市について調査しています。他の歴史資料と違い、先史部会が取り扱う資料には文字の記録がありません。どのような情報を元にして、どのような調査をしているのでしょうか。まず、人が住むようになるまでの環境の成り立ちから見ていきましょう。

地形と地質



火山の噴火によって飛散した火山灰や軽石は、一定の範囲に降り積もることで共通した地層を持つ大地が作られます。

大地は雨などに侵食されて谷を形成し、河川を作ります。水の流れが大地を削ることで地形は変化し、削り取られた土壌は水の流れに乗って遠方に運ばれ、堆積します。

台地や低地といった地形は、このような作用が長い年月をかけて作り上げたものなのです。

人と生き物



地形が変化すると、人間や生物が住む環境も変化していきます。住居の選定は自然災害に耐えうる地形であるか、狩猟・採集に適した環境であるかなど、いくつかの条件が必要と考えられます。同じ地域でも、時代によって人が住んだ痕跡が残っていない場合もあります。当時起った自然災害がきっかけで移動を余儀なくされたり、狩猟・採集のみならず、植物の栽培に適した土地を求めて移動をした可能性も考えられます。

地形や地層などの自然の条件と、人びとの生活の営みを基本の情報とし、先史時代の調査は進められています。次はもう一歩進んで、遺跡や出土した土器などをどのように分析し考察していくか、先史部会が特に取り組んでいる事例を見てみましょう。

周辺地域との比較



土器の文様や形状には地域性が色濃く出るので、集落同士の関係性を知る手掛かりとなります。同じ集団が場所を変えて別の時期に作った集落なのか、それとも違う集団が同時期に集落を営んだのかということが、出土した土器を比較することで判断できます。

そのため、立川市内のみならず、市周辺地域の遺跡も調査の対象となります。これらの調査を通じて、立川市内の遺跡の特徴を捉えています。

胎土分析



胎土（素地土）とは土器に使われている粘土質の土のことを言います。そのままで焼くと割れやすいため、砂礫などの鉱物がつなぎとして混ぜ込まれています。

土には土地それぞれに鉱物組成の違いがあり、それを分析することでどこで採取された土なのか判断できます。その違いから、土が別の場所で採取されたものか、完成した土器そのものが運ばれてきたかが判断されるのです。

種実圧痕分析



種実圧痕=土器の表面、または断面に残った植物の種実の痕跡のこと。圧痕に樹脂を注入してできた型を、電子顕微鏡を使って分析します。2000年代初頭に開発され、当時の人びとの食生活がより詳細に分かるようになりました。立川ではダイズやアズキなどの存在が確認されています。

狩猟と採集が中心だと考えられてきた縄文時代の食文化も、豊富な栽培活動に支えられていたのかもしれません。

先史部会では、この他にも立川市民の方から寄贈された石器の調査や、古墳とみられる場所の測量調査を行っています。これまでに発見されてきた遺跡の調査を元に、より広い範囲で、最先端の技術で調査を進めています。先史時代の生活を明らかにし、立川に住んだ人びとの繋がりをとらえていきたいと考えています。（山下）